「門仲」で呑む

野瀬　隆平

門前仲町の界隈を時々ぶらつく。この辺りに来るきっかけとなったのは、サラリーマン時代に豊洲に勤めていた帰りに立ち寄ったことだ。

深川の一画にあるこの地区には、冨岡八幡宮や深川不動尊など訪ねるべき所が多くあり、何より飲み屋がたくさんあるので仲間と一杯呑む店に事欠かない。

少々お高いが旨いものも食べさせてくれる小料理屋から、逆に安上がりで気楽に入れる所もある。いわゆる立ち飲みの「角打ち」が出来る店である。日本各地の銘酒が取り揃えてあり、好きな銘柄の酒を一合ずつ飲み較べることができる。つまみは乾きものだけで、安あがりですむ。すべて現金と引き換えに帳場で受け取る。

そもそも、このようなお酒の立ち飲みをなぜ「角打ち」というのか。色々な説があるが最も有力なのは、江戸時代から酒屋でお酒を升で量り売りをしており、客は買った酒をその場で呑むことができた。升の角に口を付けて呑む、というものだ。

別の説では「角」は酒の銘柄や値段を短冊状の紙や板に書いたものを壁や天井に「打ちつけて」展示する。なるほど、これなら「打ち」の意味が解りやすいが、さてどんなものだろうか。

そんなことを考えながら呑んでいて周りの客を見渡すと、おじさん達だけではなく、若い女性の二人連れや近ごろでは外国人もいて、客同士の思わぬ交流の場となる。

この店には現役をリタイアした後もしばしば訪れる。いつでもふらっと気楽に入れるので、友達との待ち合わせ時間の調整にもよい。

会う予定のある日には、せっかちな自分はどうしても早く門仲に来てしまう。そんな時には、深川不動尊にお参りをする。午後三時からの護摩炊きに参列することも。荘厳な読経が堂内に響き渡り　大太鼓が打ち鳴らされて、「ズドン！」と空気の振動が腹に響く。

信心の気持ちが薄いのに、呑む前の準備作業のようなもので、大いに気が引けるが･･･。さて、やっと約束の時間が近づいてきた参道にある、あの店に向かおう。